性格行動特徴と心身症様症状

（分担研究：小児心身症に関する研究）

宮 本 信 也

要約：幼児97人を対象として性格行動特徴と心身症様症状の関連性の検討を行った。対象の年齢は、４歳９人、５歳40人、６歳48人で、性別では、男児51人、女児46人である。調査は、幼児・児童性格診断検査と心身症症状からなる調査用紙を用いて行った。調査用紙の記入は母親に依頼した。全体の性格・行動傾向をみると、「顕示性がい強い」、「自制力がない」、「依存的」、「退行的」、「攻撃・衝動的」の５つにおいて、注意が必要とされる幼児が多いという結果であった。心身症様症状との関連では、『顕示性が強い』、『神経質』、『自制力がない』、『依存的』、『退行的』、『攻撃・衝動性が強い』の６種類の性格・行動特性と特定の心身症症状との間に、統計学的に有意な関連性を認めた。今回の結果は、ある種の性格・行動特性といくつかの心身症あるいは症状との間に関係があることを示しているものと思われた。今後、関連性の内容を検討することで、予防・対策に有用な検討を行っていくことができると思われた。

見出し語：幼児、性格、行動、心身症

【はじめに】心身症の発症には、ストレッサーと個人の感受性の２つが大きな要因となって影響する。このうち、ストレッサーに関する研究は少なくないが、個人の感受性に関する研究は多くはない。個人の感受性を規定する要因は多彩ではあるが、大きなものの一つに個人の行動特性、換言すると、「性格」の問題がある。

本研究では、小児の性格行動特性と心身症的症状の関連性について検討する。なお、調査の性質上、年長児における性格調査は結果の還元を行う上で小児とその家族に与える問題が生じる可能性がありうると思われたので、今回は調査結果の還元を行いやすい幼児を対象として調査を行った。

【対象と方法】保育所に在籍する５・６歳児を中心とした１２０人の幼児を対象とし、その保護者に調査協力を依頼した。

幼児の性格行動特性の評価は、幼児・児童性格診断検査（高木・坂本）（以下、幼児性格検査）の138項目に子どもの行動特性に関する母親の印象を問う10項目を付け加えた調査用紙を作成し用いた。心身症様症状に関しては、幼児期に比較的認められやすい症状の中から、心身症的な背景があることが少なくないものを９症状選択して独自に作成した質問紙を用いて調査を行った。選択し

筑波大学心身障害学系　Institute of Special Education, University of Tsukuba

た症状は、腹痛、気分不快、吐きやすい、夜驚、チック、便秘、遺糞、指しゃぶり、爪かみ、である。頭痛、夜尿、頻尿、下痢などの症状は、幼児性格検査の項目の中に含まれているので、別に設定することはしなかった。なお、心身症的症状は、最近の３か月間の状況を記入してもらうよう依頼した。記入は母親に依頼した。調査用紙の配布・回収は、説明を受けた保育所の保母を通して行った。

【結果】120人中、97人（80.8%）から調査用紙の回収ができた（表１）。回収できた調査用紙の記入状況は、全て、幼児性格検査の判定基準を満たしていたので、97人全員の回答を解析対象とした。

１）性格傾向

表２は、幼児性格検査の結果を示したものである。幼児性格検査では、「十分な指導を要する」（危険域）と判断されるのは、基準集団の10パーセンタイル以下、「要注意」は、10～30パーセンタイル、「普通」は30～70パーセンタイル、「良好」は70パーセンタイル以上と規定されている。そこで、「十分な指導を要する」と「要注意」を合わせ、何らかの注意が必要な状態ということで『注意群』とし、「普通」と「良好」を合わせ、『普通群』として検討を行った。

注意群の割合が全体の10%以上であった性格・行動特性は、「顕示性が強い」、「自制力がない」、「依存的」、「退行的」、「攻撃・衝動的」の５項目であった。

なお、「体質的不安定」とは、幼児性格検査の中にある身体症状に関する設問の回答結果より判定されるものである。「個人的不安定」は、「顕示性」から「攻撃・衝動的」までの、個人の行動特性を示していると思われる７項目の結果を合計して判断されるものである。「社会的不安定」とは、周囲の人との関わり状況を見るもので、「社会性」と「家庭・学校不適応」の３項目の結果を合計して評価される。

２）心身症様症状

心身症様症状については、独自に作成した質問項目と幼児性各検査の中の項目の２種類になっている。独自に作成した項目は表３のような３選択肢、性格検査の項目は表４の２選択肢からなっているため、これらの結果は別々に集計した。表３では「すこし」という回答も含めると、チック・遺糞・頭痛・下痢以外は全て10%以上の出現率を示していた。

この値は、これら10%以上の出現率の症状がときに認められる程度であれば、現在の日本の幼児ではそれを大きく問題にする必要があまりないことを示していると思われた。

３）性格特性と心身症様症状の関係

表５・６は幼児性各検査による子どもの性格特性と心身症様症状の関係を、表７～10は母親の印象による子どもの行動特性と心身症様症状の関係を、それぞれみたものである。なお、心身症状は、「すこし」以上に回答したものを、便宜的に、その症状「あり」として判定した。項目数が多いので、統計学的に有意性が認められたもののみをまとめると次のようになった。

(1) 性格特性と心身症様症状

『顕示性が強い群でチック症状が多い』

『神経質な群で寝ぼけ（夜驚）が多い』

『自制力がない群で指しゃぶりが多い』

『自制力がない群で夜尿が多い』

『依存的な群で爪かみが多い』

『依存的な群で夜尿が多い』

『退行的な群で便秘が多い』

『退行的な群で指しゃぶりが多い』

『攻撃・衝動性が強い群で下痢が多い』
『家庭不適応－家庭で心理的に安定していない群で気持ちが悪いという訴えが多い』
『家庭不適応－家庭で心理的に安定していない群で下痢が多い』
『体質的に不安定－身体症状が多い群で気持ちが悪いという訴えが多い』
『体質的に不安定－身体症状が多い群で吐きやすいものが多い』
『体質的に不安定－身体症状が多い群で頻尿が多い』
『個人的に不安定－注意群に該当する性格特性が多い群で爪かみが多い』
『個人的に不安定－注意群に該当する性格特性が多い群で夜尿が多い』
『社会的に不安定－家庭や学校などの人間関係（集団）の中で問題とされやすい特性が多い群で下痢が多い』
(2) 母親の印象による行動特性と心身症様症状
『日常生活での活動性が低い群で頭痛が多い』
『睡眠・排泄など生活行動のリズムが規則的な群で便秘が少ない』
『睡眠・排泄など生活行動のリズムが不規則な群で夜尿が多い』
『新しい場面に積極的に近づく群で気持ちが悪いという訴えが少ない』
『新しい場面に積極的に近づく群で吐きやすさが少ない』
『新しい場面にしりごみする群で頭痛が多い』
『日常生活上の変化に対しなれやすい群で吐きやすさが少ない』
『日常生活上の変化に対しなれにくい群で頭痛が多い』
『日常生活上の変化に対しなれにくい群で頻尿が多い』
『普段のきげんが大体よい群でチックが少ない』
『普段のきげんが大体よい群で遺糞が少ない』
『普段のきげんが大体わるい群で指しゃぶりが多い』
『普段のきげんが大体よい群で頻尿が少ない』
『普段のきげんが大体よい群で下痢が少ない』
『小さな変化にすぐ反応するような敏感性を持つ群で気持ち悪いという訴えが多い』
『母親にとって扱いにくい群で吐きやすさが多い』

【考察】

1）性格傾向

今回、性格検査では、注意が必要な性格特性の中で対象幼児に多いものは５つであった。ところで、この検査は標準化されたのは1960年代と古いため、この結果がそのまま現代の幼児の特徴を正確に反映しているかどうかは慎重に考慮されなければならない。また、この検査結果は母親の目から見た子どもの状態像であるので、この結果だけから、これら５項目の特性を持つ幼児が実際に多いということも慎重であるべきであろう。

しかしながら、一方では、子ども達の状態が実際にどうであれ、この結果は、今の幼児達にこのような性格・行動特性の問題が多いと感じている母親が少なくない、という可能性を示している、という点では重要なことと思われる。子どもの性格・行動に関する問題として、これら５項目に関連することがらが、日常的に母親からあげられることがよくあることが推測される。日常診療において、こうした性格・行動特性が問題として母親から話された場合、そのように感じる母親が今の母親の10～20％に存在しうる、という知識は、母親の相談を受ける立場からは、相談内容を別の視点から考慮する可能性を与えるという点で有用と

思われるからである。

2）心身症様症状

心身症様症状では、多くのものが10％以上の出現率を示していた。この値は、これら10％以上の出現率の症状がときに認められる程度であれば、現在の日本の幼児ではそれを大きく問題にする必要があまりないことを示しているものと思われた。

3）性格特性と心身症様症状の関係

今回の結果は、幼児においてある種の性格・行動特性が、いくつかの心身症状と関連性がある可能性を示唆しているものと考えられた。今回は、そうした関連性の背景を検討するだけの情報がなく、関連性の因果関係は不明である。

しかし、性格・行動特性に関しては、母親は、最近の子どもの状態のみではなく、普段の子どもの状態を全体的に頭に浮かべて記入したことが予想される。それに対して、心身症状は「最近の3か月間」の状態に対して記入してもらった。このことから、ここに現れた性格・行動特性は、心身症状を認めた最近の3か月間よりも、前の状況も考慮して記入されていると考えてよいものが多いと思われる。つまり、今回の結果は、こうした性格・行動特性を持つ幼児がどのような心身症状を持つか、という視点で検討しても、多くは大きな問題はないものと思われる。

そこで、根拠がないことを承知の上で、今後の検討の方向を示す意味も込めて、今回の結果に対していくつかの推測を行ってみた。

『顕示性が強い子どもでチック症状が多い』というのは、顕示性、つまり、周囲に自分をアピールしたいという気持ちが強いだけに、それだけ周囲の人を常に気にしており、心理的緊張感が高まりやすい、あるいは、緊張感が持続しやすいことで説明できるかもしれない。

『神経質な子どもで夜驚が多い』というのは、あれこれ気にしやすいことで脳の睡眠中も半覚醒状態が生じやすいのかもしれない。

『自制力がない、あるいは、退行的な子どもで指しゃぶりが多い』という結果は、結局年齢に比して幼い子どもでは口唇感覚の優位性が他児よりも長く、また、強く残っていることで説明可能とも思われる。

『依存的な子どもで爪かみが多い』のは、依存性が高い子どもは、周囲の状況に自信を持って自発的に関わることが少なく、それだけ、周囲の状況に対して不安・緊張感を持ちやすいと思われ、それが、爪かみにつながるのかもしれない。

『家庭で心理的に安定していない子どもで気持ちが悪いという訴えが多い』や『小さな変化にすぐ反応するような敏感性を持つ子どもは気持ち悪いという訴えが多い』のは、文字通り、心身相関で単一症候的な不定愁訴としての身体症状が出現していることを思わせるものである。ただし、その症状が、幼児に一般的と思われる腹痛ではなく、気分不快の訴えであることが興味深いと思われた。

『注意群に該当する性格・行動特性が多い群で爪かみが多い』のは、注意群に相当する場合、周囲との関係でストレス状況が多く、不安・緊張感が高まりやすいのかもしれない。

『母親にとって扱いにくい子どもで吐きやすさが多い』のは、扱いにくいと母親に感じられている子どもは、それだけ、母親から注意・叱責を受ける機会が多いのかもしれず、そうしたストレスが影響していることも考えられるであろう。

一方、心身症状が少ない、という性格・行動特性が抽出されたことは大きな意味があると思われる。心身症では、通常、発症に結びつくストレッサー、あるいは、危険因子が重視され、そうした

要因にあらかじめ対応するという方法で、予防をしようとされる。しかしながら、子どもの日常を朝から晩まで保護することはできず、ストレッサーや危険因子を完全に避けることは不可能なことである。また、いつ起こるか分からないストレッサーに対して、常に、気を配っていることは、効率的に適当とは思われない。むしろ、多少のストレッサーや危険因子があっても、発症しないようにするにはどうするか、つまり、そうしたストレッサーや危険因子に対抗できる要因（補償因子）を検討する方が、より現実的とも思われる。また、同じ生活環境で生育されながら、心身症状を呈する子どもと示さない子どもがいる。その違いは、子ども自身の持つ「脆弱性」ばかりでなく、「強さ」であることもありうることと思われる。今回、心身症状が少ない性格・行動特性がいくつか見られたことは、上記補償因子の検討をする上で大いに参考になるものと思われた。

今回見い出された性格・行動特性としては、『新しい場面に積極的に近づく子どもや日常生活へ馴れやすい子どもで吐きやすさが少ない』というものがある。新奇場面に対する積極性は、その子どもが広くて強い好奇心を持っていて、かつ、好奇心を実行に移すだけの「自信」を持っていることを思わせるものである。順応性の高さは、融通性の高さ、つまりは、状況に応じて自分を変化させる、ひいては、一つの考えや価値観にこだわらない、など、心身症の発症機制といわれる過剰適応を起こしにくい行動特性を示していると考えられるであろう。今後、子ども達にこうした性格・行動特性を身につけさせるために、どのような養育環境が望ましいのかを検討することで、危険因子の予防とは別の方向から、心身症の予防を考えていくことが出きるものと思われた。

なお、性格・行動特性と心身症状の関連性の背景が、推測できないものも認められた。それは、『退行的な子どもで便秘が多い』というものである。これに関しては、退行性と関連する他の情報も含めたさらなる調査により検討されていくべきと思われた。

また、「体質的不安定」と関連して有意性が検出された症状が３症状あったが、「注意群」の人数が少なすぎるため、この結果に対しては、単なる統計計算上の意味以外の判断は保留とした方がよいと思われた。

表１　対象　　（人）

	4	5	6歳	計
男児	4	24	23	51
女児	5	16	25	46
計	9	40	48	97

表２　性格傾向　　（%）

	注意群		普通群	
	危険域	要注意	普通	良好
顕示性強い	6.2	21.6	39.2	33.0
神経質	0.0	3.2	21.6	73.2
情緒不安定	0.0	4.1	28.9	67.0
自制力なし	3.2	11.3	25.8	57.7
依存的	8.2	10.3	42.3	39.2
退行的	3.2	13.4	38.1	43.3
攻撃・衝動性	2.1	16.5	40.2	41.2
社会性なし	1.0	4.1	14.5	80.4
家庭不適応	0.0	8.2	32.0	59.8
学校不適応	4.1	0.0	22.7	73.2
体質的不安定	0.0	2.1	24.7	73.2
個人的不安定	9.3	13.4	38.1	39.2
社会的不安定	3.1	6.2	22.7	68.0

表３　心身症様症状－１　　（％）

	いいえ	すこし	とても
腹痛	７５.３	２３.７	１.０
気持ちが悪い	８３.５	１６.５	０.０
吐きやすい	８２.５	１６.５	１.０
寝ぼけ	７８.３	１８.６	３.１
チック	９４.８	３.１	２.１
便秘	８２.５	１６.５	１.０
遺糞	９４.９	４.１	１.０
指しゃぶり	８１.５	１１.３	７.２
爪かみ	７９.４	１７.５	３.１

表４　心身症様症状－２　　（％）

	いいえ	はい
頭痛	９３.８	６.２
夜尿	７２.２	２７.８
頻尿	８１.４	１８.６
下痢	９０.７	９.３

表5　性格特性と「心身症様症状が『すこし』以上あるもの」の関係　(%)

		人数	腹痛	気持ち悪い	吐きやすい	寝ぼけ	チック	便秘	遺糞	指しゃぶり	爪かみ
顕示性	注意群	27	25.9	14.8	18.5	33.3	14.8a	14.8	11.1	25.9	18.5
強い	普通群	70	24.0	17.1	17.1	17.2	1.4	18.5	2.8	15.8	21.4
神経質	注意群	5	60.0	20.0	20.0	80.0b	0.0	20.0	0.0	20.0	0.0
	普通群	92	22.8	16.3	17.4	18.5	5.5	17.4	5.4	18.5	21.8
情緒	注意群	4	25.0	50.0	50.0	25.0	25.0	25.0	25.0	0.0	50.0
不安定	普通群	93	24.8	15.1	16.1	21.5	5.3	17.2	4.3	19.3	19.4
自制力	注意群	16	6.3	0.0	12.6	12.6	12.6	18.8	6.3	37.6c	37.6
なし	普通群	81	28.4	19.8	18.5	23.5	3.7	17.3	4.9	14.8	17.3
依存的	注意群	18	27.8	16.7	27.8	22.2	16.7	33.4	11.2	27.8	44.4d
	普通群	79	24.1	16.5	15.2	21.5	2.6	13.9	3.8	16.5	15.2
退行的	注意群	18	33.4	27.8	33.4	27.8	16.7	38.9e	11.2	44.5f	33.4
	普通群	79	22.8	13.9	13.9	20.3	2.6	12.7	3.8	12.7	17.7
攻撃・	注意群	18	27.8	27.8	33.4	27.8	11.2	11.2	16.7	22.2	27.8
衝動性	普通群	79	24.1	13.9	13.9	20.3	3.8	19.0	2.6	17.7	19.0
社会性	注意群	5	20.0	0.0	40.0	0.0	0.0	40.0	0.0	20.0	0.0
	普通群	92	25.0	17.4	16.3	22.9	5.5	16.3	5.4	18.5	21.8
家庭	注意群	8	50.0	50.0g	25.0	50.0	0.0	12.5	0.0	37.5	37.5
不適応	普通群	89	22.4	13.5	16.8	19.1	5.6	18.0	5.6	16.8	19.1
学校	注意群	4	25.0	0.0	25.0	0.0	25.0	25.0	25.0	50.0	25.0
不適応	普通群	93	24.8	17.3	17.3	22.6	4.4	17.3	4.4	17.3	20.4
体質的	注意群	2	50.0	100.0h	100.0i	100.0	0.0	50.0	50.0	0.0	50.0
不安定	普通群	95	24.3	14.7	15.8	20.0	5.3	16.9	4.3	19.0	20.0
個人的	注意群	22	27.3	18.2	22.7	36.3	13.6	27.3	9.1	27.3	36.3j
不安定	普通群	75	24.0	16.0	16.0	17.4	2.7	14.7	4.0	16.0	16.0
社会的	注意群	9	44.4	33.3	33.3	33.3	11.1	22.2	11.1	33.3	22.2
不安定	普通群	88	22.7	14.8	15.9	20.4	4.6	17.1	4.6	17.1	20.4

a: $\chi^2=4.67$、$P<0.05$　b: $\chi^2=7.27$、$P<0.01$　c: $\chi^2=4.55$、$P<0.05$　d: $\chi^2=7.67$、$P<0.01$
e: $\chi^2=6.98$、$P<0.01$　f: $\chi^2=9.80$、$P<0.01$　g: $\chi^2=4.70$、$P<0.05$　h: $\chi^2=5.07$、$P<0.05$
i: $\chi^2=4.67$、$P<0.05$　j: $\chi^2=4.31$、$P<0.05$　(全てdf=1)

表６　性格特性と「性格診断検査の心身症様症状が『はい』のもの」の関係

		人数	頭痛	夜尿	頻尿	下痢
顕示性	注意群	27	7.4	37.0	18.5	11.1
強い	普通群	70	5.7	24.3	18.6	8.6
神経質	注意群	5	0.0	60.0	20.0	20.0
	普通群	92	6.5	26.1	18.5	8.7
情緒	注意群	4	25.0	25.0	50.0	25.0
不安定	普通群	93	5.4	28.0	17.2	8.6
自制力	注意群	16	6.3	56.3a	25.0	6.3
なし	普通群	81	6.2	22.2	17.3	9.9
依存的	注意群	18	5.6	50.0b	27.8	11.1
	普通群	79	6.3	22.8	16.5	8.9
退行的	注意群	18	5.6	44.4	16.7	16.7
	普通群	79	6.3	24.1	19.0	7.6
攻撃・	注意群	18	11.1	50.0c	33.3	27.8d
衝動性	普通群	79	5.1	22.8	15.2	5.1
社会性	注意群	5	0.0	20.0	20.0	20.0
	普通群	92	6.5	28.3	18.5	8.7
家庭	注意群	8	12.5	37.5	25.0	37.5e
不適応	普通群	89	5.6	27.0	18.0	6.7
学校	注意群	4	0.0	75.0	25.0	25.0
不適応	普通群	93	6.5	25.8	18.3	8.6
体質的	注意群	2	50.0	50.0	100.0f	50.0
不安定	普通群	95	5.3	27.4	16.8	5.3
個人的	注意群	22	9.1	54.5g	27.3	18.2
不安定	普通群	75	5.3	20.0	16.0	6.7
社会的	注意群	9	11.1	44.4	22.2	33.3h
不安定	普通群	88	5.7	26.1	18.2	6.8

(%)

a: $\chi^2=7.70$、$P<0.01$　b: $\chi^2=5.41$、$P<0.05$　c: $\chi^2=5.41$、$P<0.05$　d: $\chi^2=8.99$、$P<0.01$
e: $\chi^2=5.00$、$P<0.05$　f: $\chi^2=4.30$、$P<0.05$　g: $\chi^2=10.11$、$P<0.01$　h: $\chi^2=4.03$、$P<0.05$
(全てdf=1)

表7　母親の印象による子どもの行動特性と「心身症状が『すこし』以上あるもの」の関係－1　(%)

	人数	腹痛	気持ち悪い	吐きやすい	寝ぼけ	チック	便秘	遺糞	指しゃぶり	爪かみ
日常生活での活動性										
活動性が高い	34	23.5	5.9	2.9	29.4	2.9	17.6	5.9	20.6	8.8
中くらい	61	24.6	21.3	26.2	18.0	6.5	18.0	4.9	18.0	26.2
低い	2	50.1	50.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	50.0
生活行動の規則性										
かなり規則的	46	23.9	17.4	21.7	28.2	2.2	8.7a	4.3	13.0	15.2
どちらともいえない	47	25.5	17.0	14.9	17.0	8.6	23.4	6.4	23.4	23.4
かなり不規則	4	25.0	0.0	0.0	0.0	0.0	50.0	0.0	25.0	50.0
新しい場面への反応										
積極的に近づく	50	18.0	4.0b	8.0c	22.0	6.0	16.0	4.0	16.0	20.0
どちらでもない	34	26.5	26.5	20.6	20.6	5.8	20.6	5.9	20.6	30.4
しりごみする	13	46.2	38.5	38.5	23.1	0.0	15.4	7.7	23.1	0.0
生活変化への順応性										
なれやすい	65	24.6	13.8	9.2d	21.5	1.5	13.8	4.6	16.9	18.4
どちらでもない	23	17.4	17.4	30.4	21.7	13.0	26.1	4.3	21.7	26.0
なれにくい	9	44.4	33.3	44.4	22.2	11.1	22.2	11.1	22.2	22.2
感情の反応の強さ										
強い方	59	27.1	16.9	16.9	20.3	5.1	17.0	3.4	22.1	17.0
どちらともいえない	38	21.1	15.8	18.4	23.7	5.2	18.4	7.9	13.1	26.3
弱い方	0									
気分の質										
大体きげんがよい	86	24.4	15.1	15.1	22.1	2.4e	16.3	3.5f	17.4	19.7
どちらともいえない	9	22.2	33.3	33.3	22.2	22.2	33.3	11.1	11.1	22.2
大体きげんがわるい	2	50.0	0.0	50.0	0.0	50.0	0.0	50.0	100.0g	50.0

a: $\chi 2=6.52$ $P<0.05$、　b: $\chi 2=12.68$、$P<0.01$、　c: $\chi 2=7.93$、$P<0.05$、　d: $\chi 2=10.26$、$P<0.01$
e: $\chi 2=15.00$、$P<0.01$、f: $\chi 2=9.37$、$P<0.01$、　g: $\chi 2=9.18$、$P<0.05$　(全てdf=2)

表８　母親の印象による子どもの行動特性と「心身症状が『すこし』以上あるもの」の関係－２　（%）

	人数	腹痛	気持ち悪い	吐きやすい	寝ぼけ	チック	便秘	遺糞	指しゃぶり	爪かみ
１つのことへの集中										
ながつづきする	40	17.5	17.5	12.5	17.5	2.5	22.5	5.0	20.0	17.5
どちらともいえない	39	33.4	15.4	23.1	25.6	7.7	10.3	5.2	18.0	20.5
ながつづきしない	18	22.2	16.7	16.7	22.3	5.6	22.3	5.6	16.7	27.8
気の散りやすさ										
気が散りやすい	51	19.0	23.8	23.8	19.0	0.0	19.0	4.8	4.8	19.0
どちらともいえない	39	26.1	17.4	15.2	23.9	6.5	17.4	6.5	23.9	19.6
気が散らない	7	26.7	10.0	16.6	20.0	6.6	16.6	3.3	20.0	23.3
変化に対する敏感さ										
敏感である	51	31.4	25.5h	23.6	23.6	2.0	17.7	5.9	17.7	17.6
どちらでもない	39	15.4	7.7	12.8	20.5	10.3	17.9	5.1	23.1	23.1
敏感でない	7	28.6	0.0	0.0	14.3	0.0	14.3	0.0	0.0	28.6
扱いやすさ										
ふつう	41	19.5	14.6	7.3	19.5	4.8	24.4	2.4	19.5	14.6
扱いにくい	47	29.8	21.3	27.6i	23.4	2.1	12.8	6.4	12.8	25.5
扱いやすい	9	22.2	0.0	11.1	22.2	22.2	11.1	11.1	44.4	22.2

h: $\chi 2 = 6.57$、$P<0.05$、$df=2$　　i: $\chi 2 = 5.19$、$P<0.05$、$df=2$

表９　母親の印象による子どもの行動特性と「性格診断検査の心身症様症状が『はい』のもの」の関係－１

	人	頭痛	夜尿	頻尿	下痢	
日常生活での活動性						
活動性が高い	34	2.9	26.5	17.6	2.9	(%)
中くらい	61	6.6	27.9	18.0	11.5	
低い	2	50.0a	50.0	50.0	50.0	
生活行動の規則性						
かなり規則的	46	6.5	19.6	15.2	13.0	
どちらともいえない	47	6.4	31.9	21.3	6.4	
かなり不規則	4	0.0	75.0b	25.0	0.0	
新しい場面への反応						
積極的に近づく	50	2.0	30.0	14.0	4.0	
どちらでもない	34	5.9	26.5	23.5	11.8	
しりごみする	13	23.1c	23.1	23.1	23.1	
生活変化への順応性						
なれやすい	65	3.1	27.7	13.8	3.1	
どちらでもない	23	4.3	30.4	21.7	17.4	
なれにくい	9	33.3d	22.2	44.4e	33.3	
感情の反応の強さ						
強い方	59	5.1	33.9	18.6	10.2	
どちらともいえない	38	7.9	18.4	18.4	7.9	
弱い方	0					
気分の質						
大体きげんがよい	86	4.7	25.6	14.0f	7.0g	
どちらともいえない	9	22.2	44.4	55.6	22.2	
大体きげんがわるい	2	0.0	50.0	50.0	50.0	

a: $\chi 2=7.25$、$P<0.05$、　b: $\chi 2=6.39$、$P<0.05$、　c: $\chi 2=7.91$、$P<0.05$、　d: $\chi 2=12.65$、$P<0.01$、
e: $\chi 2=10.96$、$P<0.01$、　f: $\chi 2=10.67$、$P<0.01$、　g: $\chi 2=6.27$、$P<0.05$　　(全てdf=2)

表１０　母親の印象による子どもの行動特性と「性格診断検査の心身症様症状が『はい』のもの」の関係２

	人	頭痛	夜尿	頻尿	下痢	
１つのことへの集中						
ながつづきする	40	5.0	17.5	12.5	10.0	(%)
どちらともいえない	39	7.7	35.9	25.6	12.8	
ながつづきしない	18	5.6	33.3	16.7	0.0	
気の散りやすさ						
気が散りやすい	51	0.0	23.8	9.5	9.5	
どちらともいえない	39	8.7	19.6	19.6	13.0	
気が散らない	7	6.7	43.3	23.3	3.3	
変化に対する敏感さ						
敏感である	51	9.8	27.5	23.5	13.7	
どちらでもない	39	2.6	28.2	15.4	5.1	
敏感でない	7	0.0	28.6	0.0	0.0	
扱いやすさ						
ふつう	41	2.4	19.5	9.8	2.4	
扱いにくい	47	10.6	29.8	27.7	14.9	
扱いやすい	9	0.0	55.6	11.1	11.1	

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:幼児 97 人を対象として性格行動特徴と心身症様症状の関連性の検討を行った。対象の年齢は、4 歳 9 人、 5 歳 40 人、 6 歳 48 人で、性別では、男児 51 人、女児 46 人である。調査は、幼児・児童性格診断検査と心身症症状からなる調査用紙を用いて行った。調査用紙の記入は母親に依頼した。全体の性格・行動傾向をみると、「顕示性がい強い」、「自制力がない」、「依存的」、「退行的」、 「攻撃・衝動的」の 5 つにおいて、注意が必要とされる幼児が多いという結果であつた。心身症様症状との関連では、『顕示性が強い』、『神経質』、『自制力がない』、『依存的』、『退行的』、『攻撃・衝動性が強い』の 6 種類の性格・行動特性と特定の心身症症状との間に、統計学的に有意な関連性を認めた。今回の結果は、ある種の性格・行動特性といくつかの心身症あるいは症状との間に関係があることを示しているものと思われた。今後、関連性の内容を検討することで、予防・対策に有用な検討を行っていくことができると思われた。